

(一) 宗祇との出会い

- ① 「水無瀬三吟」の表八句を読んでみて
  - ② 文学史上における宗祇とは? : 「新撰菟玖波集」と「正風連歌」と古今伝授
- (二) 「宗祇」についてもっと知りたい一研究のはじまり
- ① 文献を集める : ①図書館に行く ②本屋に ③古書店に・ ④今やネットで
  - ② 以下、知り得たことを整理する

雪ながら山もとかすむ夕かな 行く水とほく  
 梅にほふ里 川かぜに一むら柳春みえて  
 「日本古典文学大系」(岩波)は抄出で、  
 「宗祇の研究」(江藤保定) 図  
 「宗祇句集」(貴重古典籍叢刊) 図  
 「連歌師論考上下」(木藤才蔵) 図  
 「宗祇」(奥田勲) \*  
 「連歌師宗祇の実像」(金子金治郎)  
 「連歌の世界」(伊地知鐵男)

- ①人物(生年と没年)(生地、経歴) 一 生地 (\*別紙) 一年譜 (\*別紙)
  - ②業績を整理する(残された作品から) \*残されなかったものもあるが・
- A 連歌師出座以前 (推測しかない?)
- ①連歌の学習 : 執筆 式目、宗祇袖下?、稽古?
  - ②和歌の学習? : 和歌集、物語?

「宗祇の生活と作品」(金子)  
 「菟玖波集の研究」(金子)

B 連歌師として

1) 連歌会に出座する

- ①発句を詠む 宇良葉 「自然齋発句」
- ②付句をする(句数、転開、式目)  
 千句連歌 : 熊野、河越、美濃、表佐、葉守、永原千句  
 百韻連歌 : (\*別紙)
- ③座の後に、連歌作品について注をつけることもある  
 自注 : 老葉自注
- ④座の前後に、連歌について講釈することもある  
 連歌論 : 長六文 吾妻問答 心付事少々 老のすさみ 発句判詞  
 分葉 宗祇袖下 淀渡 七人付句判詞 宗祇初心抄
- ⑤連歌会での旅を紀行記に著すこともあった 白河紀行 筑紫道記

「宗祇発句集」(岩波文庫)  
 「宗祇句集のうち(宇良葉)」 図  
 「古典文庫 千句連歌集」  
 「宗祇の研究」(江藤保定) 図  
 「宗祇連歌の研究」(両角倉一)  
 「連歌古注釈の研究」(金子)  
 「宗祇連歌古注」(金子)  
 「日本古典文学大系 連歌論集」(岩波)  
 「連歌論集二」(木藤)  
 「宗祇旅の記私注」(金子)  
 「続群十八下」(白) 群十八(築)  
 「新日本古典文学大系中世日記紀行集」  
 「新日本古典文学大系」(岩波)  
 「新撰菟玖波集実隆本」(貴重古典籍叢刊)  
 「新撰菟玖波集の研究」(金子)  
 「宗祇句集」、「宗祇の研究」

2) 連歌集を編纂する。

- ①他撰 : 他人の連歌を 「竹林抄」「新撰菟玖波集」
- ②自撰 : 自分の連歌を 萱草 老葉 再編老葉 下草 下草改修 宇良葉

3) 研鑽を積む

- ①独吟の連歌 独吟百韻 稽古連歌 独吟千句 三島千句
- ②連歌、連歌論、連歌集の学び 一条兼良、宗砌、心敬、専順
- ③古典の学習又は研究・ ・ ・和歌の読み取り : 和歌を書き出し注釈をつける  
 ☆師から : 一条兼良、東常縁、飛鳥井栄雅

「万葉集叢書十」  
 「続群書類従」十八下  
 「中世古今集注釈書解題三」(片桐洋一)  
 「源氏物語古註釈叢刊四」「源氏物語大成八」  
 「未刊国文古註釈大系十一」  
 「日本古典文学全集 歌論集」(小学館)  
 「自讃歌注十首集成」(黒川昌亨・王淑英編)

万葉集	「万葉抄」(万葉集宗祇抄)	1600余首
伊勢物語	「伊勢物語山口抄」	268首
古今和歌集	「古今和歌集両度聞書」	1111首?
源氏物語	「種玉編次抄」「雨夜談抄」「源氏物語不審抄出」	
歌論書	「俊頼髓脳」(書写)	
新古今集	「自讃歌注」	170首
藤原定家	「詠歌大概注」「百人一首」	113首 100首
菟玖波集	通読?	

☆先学より? 「詞字注」「十代集抄出」「堀川院後百首抄出」

「国歌大観」  
 ←「宗祇連歌の研究」(両角倉一)

\*「彼の古典の学習の最初の契機は、連歌を中心とする創作のためであった」  
 「和歌・連歌の創作のための補助学としての効用が潜在的にあったと思われる」

4) 門弟への指導(奉仕)

- ①加点する 後土御門天皇 勝人親王
  - ②門人の受講と成果
- |           |   |
|-----------|---|
| 連歌集編纂     | 肖柏「自然齋発句」(宗祇)                                     |
| 連歌式目      | 肖柏「連歌新式」  |
| 源氏物語      | 肖柏「弄花抄」 兼載注 宗碩「十口抄」                               |
| 古今集(古今伝授) | 三条西実隆、宗友「金古訓和歌集聞書」、宗長・泰誼、<br>姉小路基綱、近衛政家・尚通、宗碩、東素純 |
| 万葉集       | 実隆「一葉抄」(十卷)                                       |
| 伊勢物語      | 肖柏「伊勢物語肖聞抄」、宗長「宗歆聞書、足利義尚、<br>大内政弘(山口抄)            |
| 自讃歌注      | 肖柏「九代抄」、宗長「宗長秘歌抄」、兼載注                             |
| 百人一首      | 宗長、姉小路基綱、   |

◎宗祇は、連歌の稽古のために参考にすべき書物として、以下の通りである。  
 「万葉集以下八代集、源氏、伊勢物語、大和物語、狭衣、宇津保、竹取などやうの物」  
 (吾妻問答)  
 「勅撰には先三代集なるべし、道のために見侍べき物は、正風躰、詠歌躰大略、百人一首 秀歌大躰 近来和歌、未来記等なるべし」 (老のすさみ)  
 「自讃歌・百人一首などは少なき物にておぼえやすく候」「いかさま初学の時より、古今集・新古今二部のあひだを随心して自見をもち給ふべし」 (宗祇初学抄)

3 宗祇の研究のテーマ

個々の作品を通して、宗祇文学の本質を探ることにある。連歌を愉しみ、学びで支え、「雅の世界に心を萌して」著されたそれぞれの作品から読みといていく事にある。宗祇はどのようにして、何かに到達し得たのだろうか?

敢えての結びとして・ ・ ・宗祇の連歌は、時の移ろいに主眼を置きながら景物(場所)の展開、心の変容を詠み続けていく行様の文学といえる。これは、古今集以降基本となった勅撰和歌集の配列に倣ったものであるとも言える。勅撰和歌集の春、夏、秋、冬、恋、旅、雑の部立てに倣い、連歌集もそのように編集されている。そして、これらの歌題は、宗祇の連歌においては、展開される構成要素(季題)ともなっている。

とりわけ「百韻連歌」では、季、恋、述懐、出家、旅が面をかえてくり返して詠まれる。この意味するところを「一旦死んでこそ再び生きる、新たな再生を期する」と、「輪廻」の世界からの「解脱」を心奥に説いているのではないだろうか? と、読み解いてみた。連歌式目の眼目である打越の禁止が「輪廻」とよばれ忌避されるのも、だからこそ、途中では戻ってはいけないうかもとを考えてみる。

連歌を通して、宗祇の希求した世界とは、「正風連歌」であったか?

「幽玄 有心 長高き」句を詠むことは、その理にかなっている。